レッシング以降のファウスト文学

梗概

兒玉　麻美

序論――ファウスト文学の源流と発展

16 世紀以降、ファウスト博士の知的好奇心と魔術への試み、その冒険とおぞましい地獄堕ちの光景についての物語はヨーロッパ中に伝播し広く受容されてきた。ヨーハン・シュピースにより出版された最初の民衆本『実伝ヨーハン・ファウスト博士』(1587 年）においてはファウストの破滅が恐怖と畏敬を催させるような形で描かれ、神の領域を侵犯しようとする人間の傲慢は地獄堕ちの結末によってきびしく戒められた。

18 世紀中盤、啓蒙主義最盛期のドイツにおいてファウスト文学は本質的な変化を迎える。ファウストの認識衝動は劇作家レッシングによって肯定的に捉えられ、ここで文学史上初めて救済の概念が提起される。本論文は、レッシングによる断片『ファウスト博士』（1759 年）の成立背景、テクスト本文の解釈、また後代のパウル・ヴァイトマン、フリードリヒ・ミュラー、レンツ、クリンガー、レーナウ、グラッベの作品との影響関係などを検討しながら、従来はゲーテの『ファウスト』（1832 年）を中心になされてきたファウスト文学のアクチュアリティをめぐる解釈を別視点から捉え直そうと試みるものである。

第一章　レッシングの断片『ファウスト博士』

レッシングが『最新の文学に関する書簡』第 17 号（1759 年）において行なった呼びかけ、すなわちフランス古典劇とゴットシェート詩学の影響圏から脱し、新たなドイツ国民文学を創出すべきであるという訴えは広く注目を集めた。独創的な天才による努力と挫折を描き出すにあたって、レッシングはファウスト伝説を理想的題材として選び取った。この素材は 18 世紀中盤においてはすでに低俗なものに成り下がっていたが、レッシングの再解釈により新たな価値基準の中に迎え入れられ、1770 年代以降の文学運動のなかで重要なテーマとして受け止められていくことになる。一方で、70 年代の半ばまで取り組みが続けられたにも拘わらず断片『ファウスト博士』が完成へ至らなかったという事実は、救済構想の実現困難性をこの時点ですでに印象づけても

いる。

レッシングのファウスト断片が完成へと至らなかった原因としては、悪魔や天使といった非現実的モチーフの扱いに対する懸念が背景にあったことが考えられる。レッシングは最終的にこうした要素の解体へと向かい、市民悲劇『エミーリア・ガロッティ』（1772 年）においては悪魔的な性質をそなえた人間を誘惑者として登場させ、また『賢者ナータン』（1779 年）や後期の宗教哲学的テクストのなかで哲学的真理と啓示的真理の調和を展開することで、断片『ファウスト博士』において積み残した問題を解決へと導いていった。

断片『ファウスト博士』はそれ自体としては完成へと至らなかったものの、「ドイツの各地からファウストが次々に発表されるような時代」がやがて到来するだろうというレッシングの予言はまもなく実現された。しかし、自由と独立を求めるファウストの限りない活動性にはネガティブな側面が少なからず含まれており、レッシングは断片の中でこうしたエピソードを具体的には描きえなかった。ファウストの地上における自己実現に対してレッシングは一切関心を向けなかったことが伝えられているが、悪魔と契約しすべてを手にしたファウストの世界との関わりが描かれず、序盤と結末の断片のみが残されるというレッシングの構想は、知識欲の肯定と救済というふたつのテーマの間に横たわる溝の深さを印象づけるようにも思われる。

第二章　救済に内在する不安
――フリードリヒ・ミュラーとパウル・ヴァイトマンのファウスト作品

パウル・ヴァイトマンの『寓意劇ヨーハン・ファウスト』（1775 年）とフリードリヒ・ミュラーの『韻文劇ファウスト』（1778 年断片、1823 年完成）はともにレッシングの作品から刺激を受け、救済という結末を完成形で提示するという目的意識のもとに執筆されたが、どちらもファウスト文学史研究のなかでは概要が紹介される程度の扱いにとどまっており、見るべき点の少ない作品として低評価を受けてきた。ここでは「力の無力」というテーマを集中的に取り上げ、レッシングの断片において展開される悪しき意図と善い結末の結びつきを描いたエピソードが、ヴァイトマンとミュラーのテクストにおいてどのように変容され、結果として救済構想を内部から崩壊へと導くきっかけとなったかについて考察を加える。

パウル・ヴァイトマンは『寓意劇ヨーハン・ファウスト』最終場において天使イト

ゥリエル降臨の情景を描き、神による恩寵の揺るぎなさを強調する方向へと向かったが、その一方で世界向上のために力を尽くすファウストの善行がすべて覆され、人々に不幸をもたらしてゆくというエピソードのなかには、傲慢への戒めと人間存在の無力が印象的な形で現れ出ている。一方、ミュラーはレッシングからのアドバイスに従って『韻文劇ファウスト』の結末で救済を描き、理性の勝利と夢想の克服によって全八幕の劇を締めくくっている。しかし最終幕のテクストにおいて、ミュラーはその調和的解決に何度も疑義を挟み強迫症的な確認行動を繰り返しており、切狂言を締めくくる「ファウスト博士万歳」の叫び声はどこか不穏な予感を漂わせている。

レッシングによる救済構想はそのポジティブなイメージによって多くの人の心を捉えたにもかかわらず、実現の段階になると多くの困難が生じ、また楽観的で強引な展開であるとの批判をも浴びることになった。自らの力を用いて他者をよりよい生へと導き、歴史的・政治的誤謬を正し、世界に救いをもたらすことが果たして可能であるのかという問いは､啓蒙主義という思想そのものに内在するアポリアと照応する形で、その根底に横たわる問題性を鋭く提示してみせる。両作においては、世界を変革しうる力を持つこと自体がファウストに内的不安定をもたらす契機となっており、以降のファウスト文学においてふたたび悲劇的な地獄堕ちの光景が描かれるようになる予兆をすでに孕んでいると言える。

第三章　自己喪失の茶番劇

――J. M. R. レンツのファウスト断片『地獄の審判者たち』

レンツは断片『地獄の審判者』（1777 年）において主人公ファウストに自己自身を投影し、一方で救い主バッカスには親友ゲーテの姿を重ねて描いた。1776 年にゲーテが日記内に記した「レンツの愚行」が両者の決裂の契機となった事は広く知られているが、レンツは以降もゲーテとの関係修復を望み続け、次第に精神の闇へと囚われていった。

『地獄の審判者たち』においてファウストの救済を決定づける要素、バッカスからもたらされる「お前の心は偉大だった」という呼びかけは、レンツがゲーテの口から聞きたかった言葉そのものであった。一方、レンツは救いが決してもたらされないことを自覚しており、この断片を「茶番劇」として位置付けることで作中人物への自己投影の状態から身を切り離し、客観的な態度へと立ち返るそぶりも見せている。レン

ツは『家庭教師』（1774 年）や『軍人たち』（1776 年）においても、独立と自己実現への欲求が破綻状態へ導かれる様子を残酷な筆致で描き出したうえで、結末の強制的調和を「喜劇」と呼ぶことによって歪な世界像を提示しており、こうした態度はレッシング作品のパロディーあるいはカリカチュアとしても解釈されている。

レッシングと同様、レンツもまた偉業を成し遂げようと邁進する天才の姿を肯定的に描き出すべく劇作に取り組んだが、そうした独行者がしばしば外界と衝突し、耐えがたい被制約性や孤独のなかで自己破壊へと向かわざるをえないことを見抜いていた。主観的自我と客観的世界の対立という要素をファウスト文学のなかでいち早く示した点において、レンツの断片はのちのクリンガーやレーナウの作品と問題意識を共有した先駆的な試みであったと言える。

第四章　啓蒙主義とペシミスムス
――クリンガーの『ファウストの生涯、行状、地獄行』

クリンガーの小説『ファウストの生涯、行状、地獄行き』（1791 年）はレッシングの断片以上にはっきりと啓蒙主義的な主張を織り込んで筋書きを展開しており、ここでは主人公ファウストは漠然とした真理の追究者ではなく、人類を啓蒙する装置である印刷術の発見者として登場する。しかし、ファウストの発明の価値を理解する者は現れず、啓蒙の対象となるはずの民衆たちがひたすら堕落した無価値な存在として描かれる点において、クリンガーのファウスト作品は啓蒙のひとつの挫折像を示すものであるように思われる。

個人に対する社会の無理解、抑圧的状況、既存の封建体制などに対する怒りと不満の荒々しい表明は、シュトゥルム・ウント・ドラング期のレンツとクリンガーの作品を特徴づける要素であるが、一方で、腐敗した世界に対する反抗的心情の吐露は、悪しき旧弊の弾劾と不正への告発という側面において、啓蒙主義的な側面をも垣間見せる。クリンガー作品のファウストは、善人の仮面をつけた人々の歪んだ本性を暗闇のなかから引きずり出し、白日のもとへと晒し続けるが、次々と明らかになる世界の真の姿は、彼をただ救いのない絶望へと追いやってゆく。荒々しい感情の波、冷ややかな批判、現状打破への憧憬、革命の挫折などが目まぐるしく行き交うなかで、ファウストの迎える結末は自己破壊的な方向へと向かわざるをえない。

クリンガーのファウスト作品を特徴づけるのは過剰な残酷描写であり、カニバリズ

ムや虐殺を扱った悲惨なエピソードの数々は作者自身の世界憎悪を示すものとしてしばしば解されてきた。しかし、こうした描写はむしろ世界の惨状を極端な形で提示し、読者の心に憤りと抵抗感を芽生えさせようとするクリンガーの意欲を反映させたものであった。劇作家として出発したクリンガーがのちに小説という執筆形式へと移行していった背景には、対話の応酬によって刻一刻と変化する情景を描くドラマの形式を脱して、より思弁的・哲学的に緊密な構造をもったテクストを提示し、読者をいっそう複雑な思考へと導こうとする啓蒙主義的な意図があったと考えられる。

『ファウストの生涯、行状、地獄行』を締めくくる地獄堕ちの光景は決してこの主人公への否定的評価ではなく、むしろ救いがたいほどに堕落してしまった地上世界に対する激烈な批判として機能している。こうした点において、レッシングによる明るい未来への確信にみちたオプティミスムスの啓蒙主義と異なり、クリンガー作品における啓蒙の試みは、完全なペシミスムスに裏付けられた抵抗運動であったと位置づけられる。

第五章　19 世紀オーストリアのファウスト作品
――レーナウの『韻文詩ファウスト』とグリルパルツァーによる断片

救済や地獄堕ちの結末をはっきりと見据えて手がけられた他のファウスト作品と異なり、レーナウの『韻文詩ファウスト』（1836 年）はその着地点を明確に設定されないままに執筆が進められたという特異な成立背景を有している。結末はファウストの自殺によって締めくくられているが、レーナウ自身も書簡中で「結末はある転換を迎えました。あなたはきっとそれに驚くでしょう」と伝えており、この「転換」が読者にとってだけでなく、彼自身にとっても意外性をもったものと認識されていたことがわかる。

ファウストの自殺という結末は、救済か地獄堕ちかという二分法的解釈をすり抜ける曖昧さをもっており、研究においてもその解釈は一致をみていない。悪魔との契約や苦しみに満ちた生涯、知的探究心など、自らを構成するすべての要素が夢にすぎなかったのだと嘆息するファウストに対し、メフィストは「夢なのはお前のその逃避、その救済こそが夢なのだ！」と呼びかけてその逃避的願望をせせら笑っており、レッシングやミュラーが描いた夢による救いのポジティブな可能性はここで不気味に反転させられている。人生をはかない夢にたとえる表現は、同じビーダーマイアー期を代

表する劇作家グリルパルツァーの作品においても散見されるが、グリルパルツァーはファウストの真の幸福が「自己抑制と心の平和」のなかにあると結論づけ、静観と諦念のなかにある穏やかな幸福を際立たせている点においてレーナウとは対照的な考えを示している。

『韻文詩ファウスト』の結末は自己破壊的で逃避的な性格をもつもののように思われるが、レーナウにとって生への懐疑とは決してネガティブな意味ばかりをもつものではなく、自らを鼓舞し、前へと進む原動力をもたらしうるものでもあった。生きることが苦悩と同義であるならば、苦悩を続けることはすなわち生き続けることを意味しており、こうした姿勢のなかで、晩年の彼はヘーゲルの哲学への関心を強め、人間と自然のあいだの弁証法的関係を模索する道をたどることになった。

第六章　破壊と笑い、あるいは破壊的な笑い
――C. D. グラッベの『ドン・ファンとファウスト』

グラッベは彼の文学的営みにおいて、新たな構築のための解体というコンセプトにとくに意義を見出しており、悲劇『ドン・ファンとファウスト』（1829 年）においても主人公ファウストに「廃墟からの創造」を訴えさせている。こうした破壊的意志は、彼の演劇的野心や名誉欲の表れとして解されることも多いが、一方でグラッベは道化的自己表現のうちに否定性とユーモアの結びつき、悲喜劇的な調子を盛り込むことを忘れてはいない。

レーナウが究極の自己実現としての自己放棄へ到達し、生の苦しみからの解放としての死になぐさめを見出していったのに対し、グラッベは諧謔とユーモアをたくみに用いることにより多視点的な客観性を獲得する。『ドン・ファンとファウスト』においても、享楽主義者ドン・ファンの饒舌さや喜劇役者的な立居振舞いは、対象への解剖学的な冷たさを持ったファウストの態度と響きあい、劇全体に緊張感あふれるコントラストを生み出している。一方で、ドンナ・アンナの愛をめぐる両者の争いが多くの犠牲をうむことにより、両主人公の征服者的本質に内在する残虐性が暴露され、誘惑者ドン・ファンとの対置のなかで、学者ファウストのもつ認識衝動の罪深い側面もまた白日の下にさらされる。

ここで、正反対の本質をもつ両者がともに心の拠り所として取り上げ、完全にポジティブなイメージで用いる唯一の概念が「祖国」であることは興味深い事実である。

『ドン・ファンとファウスト』における愛国主義的要素はナチス時代に改めて利用価値を見出されることになるが、グラッベ自身がこうした祖国愛描写にどの程度真意を反映させていたかについては疑問の余地がある。祖国愛の強調はドンナ・アンナの愛を得るための謀略のレトリックにすぎない事がテクスト序盤においてすでに明かされてしまっていることに鑑みれば、「王と名誉、祖国と愛」というスローガンが提示する欺瞞に満ちた英雄性は、今にも喜劇へと転じかねない危うさをも露呈する。

結論

レッシングによって強調されたファウストの天才的独創性やプロメテウスを思わせる反逆精神は好意的に受け止められたが、一方で独立性や異質さゆえにもたらされる孤独と無理解は、社会憎悪や自己否定といったネガティブな意味合いへ転じる危険をも孕んでいた。また、悪魔との契約とそれに伴う数々の罪を英雄的に描き、結末を救済へと導こうとする試みは構造自体に問題性を有しており、救済と恩寵への切実な願望にはつねに罪からの逃避の後ろめたさが付きまとった。

ファウスト文学への取り組みは、生き生きとした体験と引き換えに犯さざるをえない罪を見つめる自己断罪の試みとしての本質を持っており、レッシング以降繰り返された救済と地獄堕ちの描写は啓蒙され近代化された自我の肯定的・否定的側面を映し出すものとして、今なおそのアクチュアリティを失っていないと言える。